

三、療養所退所者を対象とした調査

1. 「これだけは、言っておきたいこと」

まず、「これだけは、言っておきたいこと」を伺った「聞き取り項目」欄の内容を整理してみる。ここには、「強制収容」・「絶対隔離」政策の本質が、これによって退所者の被った被害の全体像、それに対する退所者の痛憤、思いや願い、すなわちその生き方として凝縮して語られているからである。

(1) 全てを失った - 「人生被害」とその思い

被害は、まさに人生総体にわたる人生被害である。こうした被害の実態を後世に伝え残して欲しいとの願い、今回の調査を区切りに前向きに生きていこうという強い意思が示される。

「調査を受けたのは、なぜ自分がこの人生被害を受けなければならなかったのかを明らかにしたいからである。医師の『ハンセン病』『入所しなさい』の一言で、34才まで積み重ねてきた人生(一家の大黒柱としての役割、新聞社の仕事、新築の家、ふるさと)をすべて一度に失った。残された妻子は極貧の生活を味わい、家庭はこわれた。取り返しのつかない人生被害を受けた。既に当時の医師は亡くなっていて直接尋ねることはできないが、他の地域の医師に出会っていれば外来治療の可能性もあったのではないか。『治る病気だ』という説明があれば、自殺する程苦しみ、すべてを置いて島から逃げ出し園に入る必要もなかったのではないか。あのハンセン病のおそれ、差別を生んだのは予防法であり医師ではなかったか。無料皮膚診療所はハンセン病刈りで、私は新患発見対策の犠牲者ではなかったか。

家も仕事もすべての財産をなくし、取り返しのつかない人生被害を受けた。800万円の賠償に不満を言うつもりはないが、その人生被害で失ったものに比べると800万円は人生の一年分くらいの額でしかない。しかし、そのような金額よりも、この交渉の中で自分の心が回復したことが最も価値のあることである。くやしさをバネに書いた本は、表彰され、講演も依頼された。親戚の誇りとして迎えられた。今の島はハンセン病退所者の受け入れも活発な進んだ地域となった。しかし、もう島には戻れない。暮らすことはできない。」(1944年生 男性)

「らい予防法があり、いろいろな差別があったこと、退所してからもかくし続けなければならないこと、このようなことは後世に残してほしい。会社のTV等でハンセンのことを見ると、いたたまれなくなりその場をはずしてしまう。社会の中にも偏見を感じると「やっぱり話せない」と思う。なるべくならハンセン病から解き放たれたいと思う。他の病気なら治ったら終わりなのに、この病気はいつまでもついてまわる。切りたいのに切れない。墓に入るまで持って行かなければいけないだろうと思う。受け身で生きてきたところが多いので少しでも何かできればと思い、視覚障害者のボランティアもしている。あまり後ろを振り返るのはやめたい。今回このような話をし、1つの区切りにできたらと思う。昔はあであったこうだったと振り返るのではなく前向きに生きていければいいと思う。」(1950年生 女性)

(2) 隔離がいけない - 隠して嘘について暮らす

病気を隠し、療養所にいたことを隠すためには、必然的に嘘をついて暮らさねばならない。それはまた、周囲の環境や人々から、自らを「気持ちのベール」で覆うことだったと言える。それはまさに、「なぜそんなに隔たりがあるのか、何かあったのか」と詮索されぬように、人々に「ベール」の存在を気取られぬように薄く、そのために常にその綻びを恐れ、繕わなければならないという負担として、退所者の生活を制限するものでもあった。

「若い頃から、ずいぶん苦労してきましたけれども、裁判闘争があって、それで、原爆なみの支援金などもいただいて、自分の働いた分の年金も合わせて、生活は非常に楽になりました。その辺は政府に対して非常に感謝していますよ。ただ、苦しかったけど、苦しい思いをしてきたんだけど、ウソをついてウソがウソをついて、暮らしてきたんだけど、妻子にも自分の過去は話をしていない、かくしたままですが、家内はウスウス知っているとします。はっきりは言っていないんですよ。子供は100%わかりません。

制度を作るなら、そのような実効、保障のある制度までつくればいいわけですよ。それで、かくれてでも生活はできたはずだけど、保障もない制度でしょ、要するに強制的に収容して、無理矢理カクリしたりしてね。その後は、何の保障もなかったですからね。それが一番いけなかったんじゃないかと思えますよ。」(1937年生 男性)

「気持ちのベールがある。一生続くと思う。自分から、他人へハンセン病元患者であることは話せない。」「ハンセン病のアンケートはお願いされても、自分がお願いすることはできない。元患者であることは絶対にバレたくない。」(1941年生 男性)

(3) 社会に出て失敗

他方で、社会生活におけるあまりに大きな困難は、社会に出て失敗だったという痛切な思いになる。

「社会に出て失敗した。多磨にずっといれば楽だったと思う。社会で生活するのは大変。神経ばかり使ってきた。病院に行っても長い時間待たなくてはいけない。」(1959年生 男性)

「出てからがむしろ大変だった。毎月毎月園に来なければならない中での仕事が大変だった。」(1930年生 男性)

「これからの方が大変。今はこれからどう生きるか考えられない。ホーム、宗教関係でのケア、行き場所、どれもまだ分からない。しばらくは今のままで。これから社会に出る50代、60代は大変。社会の流れに乗れないと思う。若かったので自分は何とかできた。」(1951年生 男性)

(4) こどもが産めなかった

肉親や医師に「産まない方がよいと言われ」、こどもが産めなかった人の嘆き。しかも、医師からの意見は、平成に入ってからのことである。人権感覚の欠如した医師の責任は大きい。

「『子供を産まないほうがよい』と言われたことで、人生が決められてしまった。もしかしたら子供も産んでいたかもしれない。『なんでそんなこと言ったのか』それだけは言いたかった。母親があれだけ苦しんだということ。昔からの病気のイメージが母を苦しめていたのだと思う。平成に入って結婚した。結婚について、夫の母が病気のことを気にして、私に同意の上で主治医に電話をかけて聞いたことがある。その後、夫と私と夫の母を前に主治医が『子供は産まない方がよい』と言った。私だけに言うのではなく皆の前で言うなんて！

子供がどうしても欲しいと思っていたいかなかったこともあり私の結婚生活は子供を産まない生活に決まってしまう。医学的に産んではならないことでもないのに、『産まない方がよい』と主治医から言われたことがどうしても許せないと思った。私の人生が違っていったかもしれない。ささえられて今は幸せだが、どうしてもそのことが気になった。」
(1957年生 女性)

(5) 家族・こどもが一番心配

一番思いをかけ、心配なのは自分以上に家族のことである。

家族、こども

「自分の亡きあとのこと。子供、家族のことが心配(1番に言いたいこと)」(1952年生 男性)

兄弟

「自分以上に精神的に苦労したのは自分の兄弟であり、よく我慢してくれたと思う。」
(1941年生 男性)

(6) 墓場まで

病気のことを隠している人は、墓場までもっていく決意をしている。

「自分の病気のことを、今では、知られてもよいと思うことがある。今や、世間では、それほど差別はなくなってきたし、自分自身もずぶとくなってきた。しかし、結局、このことは、墓場まで誰にも言わずに持っていこうと思っている。これは、どんなに補償制度を充実させても解決できない、自分の中に生じてしまった恐怖心から来るものであり、きっと被害者の誰もが持っている負担だと思う。」(1947年生 男性)

「社会の中にも偏見を感じると「やっぱり話せない」と思う。なるべくならハンセン病から解放されたいと思う。他の病気なら治ったら終わりなのに、この病気はいつまでもついてまわる。切りたいのに切れない。墓に入るまで持って行かなければいけないだろうと思う。」(1950年生 女性)

(7) マスコミへ

マスコミへの強い期待も語られている。

「時代によってどうなっていくのか。3園長の系統の医者たちが園内で何をしたか、どのような治療をしたのかをマスコミが書いてほしい。マスコミは過去のことを調べて将来どうなるのかの検証をするのが役目。」(1930年生 男性)

「裁判のあと、マスコミが取りあげるようになったが、活字だけでなく、身近な問題をもっとよくしてほしい。医療の問題など日常生活の助けになることをもっと考えてほしい。ほんとによかったと思えるように。」(1941年生 男性)

(8) 権利放棄

当然受けられるべき権利さえ放棄する。それほど病気を知られることへの恐怖は大きい。

「補償金をもらう手続きが、自分ではできなくなったら、辞退しようと思っている(そう決めている)。それは、代筆が必要になったら、自分の病気が知られてしまうからである。」(1947年生 男性)

(9) 国へ - 遅すぎた対策

「国のいろんな対策は遅すぎたと思う。もっと早く、考えてほしかった。年にとってちゃんと生活できるようにはして欲しいが、今はいたって健康。国の方は担当者が次々変わる。いいところまでいっても又人が変わるとともにもどる。ハンセン病問題は根が深い。金銭的な問題だけでなく、心の問題もある。退所者の会も年々参加者もふえてきている。」(1947年生 女性)

「社会復帰後、給与金制度が出来てうれしいけど園側(社会福祉課)の取りあつかいで減給されたことがくやしい。福祉自体も差別をなくしてほしい。全国一律の料金にしてほしい。給与金などで職員と交渉している中でも自宅に無言電話があったり非通知があったりしていやがらせがある。」(1943年生 男性)

(10) 人生の肯定 - 意外と自分はおもしろい人生

様々な、人権侵害、被害を受けながらも自分の人生を肯定する人もいる。そこに、人々の強さとともに、そうしなければ生きていけないほど厳しい状況が示唆されている。

「自分はおもしろい病気にかかったものだ。意外とおもしろい人生だったのではないか。良い人と出会えた(この病気のおかげで)。」(1937年生 男性)

2. 「望郷の想い」「逃走」について

多くの人々が、望郷の思いを抱き、帰郷、退所を願い、さらには逃走を考え実行した経験を語っている。しかし、守衛、監房を恐れ、実現出来ず、病気を治すというあきらめの気持ちになっていく。

(1) 強い望郷の思い

望郷の思い

「それは皆同じ。夕方になると遠くの電車の灯をながめてた。」(1925年生 男性)

「5年間、ずっと思っていた。早く治したい、そして早く家に帰りたいと、強く強くおもっていた。それだけ。」(1928年生 男性)

「小6で入所。農家だったので、寮の食事が少なく、いつも空腹だったことが悲しかった。家に帰ればとりあえず食べることはできるので、それで帰りがたかった。一生帰れないのかと思うと悲しかった。」(1933年生 男性 1944年入所)

「入所してすぐに毎日つらく寂しかった。入所には母親が付添い1週間滞在するが、母親が帰った後、更にさびしく帰りがたかった」(1952年生 男性 1967年入所)

「帰りたいと思った。出たいと思っていた。」(1940年生 女性)

社会に出たい

「青春期でしょ。思春期。青春。やはり結婚したい訳ですよ。療養所内というのはある程度、男女間というのも制限されてる訳です。だから、同じ年代でも軽症な人もおれば、完全に両方曲って重傷な人もいるわけだから、そこで結婚したら、片方は出て行く、私は残らないといけないというのが嫌だということもあるし、お互いに出ないで、そこで暮らそうかという人は、くつつくわけです。ぼくらは、出たいとい気持ちがあるわけだから、そこで、一緒に出られるような人をさがすけども、なかなかみつからない。だから出て、社会に出て働けば、何とかなるんじゃないかなあという、そういう欲望が、我々にはあったんですね。若い世代には。それは、いつわざる、人間の本能的なものですよ。それがあってはじめて、あの当時を、出ようと、それで犀川先生のおかげで在宅治療ができたもので、それによって職業訓練ができて、免許証をとらすとか、社会の風習を教えるとか、そういう形になって、どんどん出ていくようになった。」(1937年生 男性)

「ずーと思っていました。再入所までは。社会復帰するつもりだったから。中で経験した、不自由感は少なかったけれど、望郷はずっとあった。再入所して、目の症状がひどくなって、失明を覚悟した時は、一生ここにいる気もちになった。」(1938年生 男性 1952年入所)

外出制限、守衛、監房への恐れ

「母親は生きていた時は行きたかったが、守衛がきびしかったので7年間で1回しか行っていない。」(1930年生 女性 1957年入所)

「つかまらなければ逃げたかった。帰りたいし、ご飯が腹一杯たべられるだけでも家にいた方がいいから。毎日のように思ったわけではないけど、「帰りたいなあ」とはしょっちゅう思っていた。監房に入れられるのが恐かった。」(1932年生 男性)

「厳しくてつかまって叱られた時は「イヤーこっちには(南静園には)入りたくない」と思ったりしていた。」(1943年生 女性 1950年入所)

「入園して半年ぐらいたった時、母が死亡したという電報がきた。すぐに行かないかんとあって許可を求めたが、許可がでなかった。母の死に目に会えなかった。子供心にも「何故行かせてもらえなかったのか」と納得いかなかった。父は既に死んでいないので、許可が下りなかった理由の説明もなかった。」(1944年生 男性 1955年入所)

あきらめて、病気をなおす

「入所の頃は 毎日 “帰りたい” と想い しばらくして “病気を治す” という気持ちにあきらめになった」(1939年生 男性)

「寂しい思いや、何時になったら退所できるのだろうという不安はあったが早く病気を治して家に帰りたいという気持だった。」(1934年生 男性 1971年入所)

「帰りたいとは思ったが、病気を治してから帰ろうと思ったので、逃げて帰ろうとは思わなかった。」(1934年生 男性 1960年入所)

「全員にあった。皆んな、療養所から出たいと思っていた。ある程度の年齢になっていて、社会へ出て生活をしていく自信のない人は、園の生活を望んでいる人もあった。」(1950年生 男性)

親に拒否される

「1956年。新良田入学後に一度実家に外出帰省した。しかし、父からお金を渡され、実家になるべく寄りつかないようにと示唆された(親戚がくると困るから - という理由。)父からお金はたくさんもらったので、そのまま東京に行った。この時以来、実家には帰らなかった。家族が沖縄に帰る際も一緒に沖縄の療養所へと頼んだが、父から断られた」(1937年生 男性 1955年入所)

「離島にある実家に帰りたいという気持は常に持っていたが、それがままならない状況であったため外出して出向くのは那覇に住む伯父・伯母のところであった。そこで一晩

「すくすくことによって家・家族に対する思いをうめ合わせていた。」(1944年生 女性 1962年入所)

「一度出て、本島で一年暮らしたが(隠れる様に)、皆(家族)が困るからと、父に言われて、また入所する事になった。(1931年生 男性 1944年入所)

帰っても会えない、出られない

「小さかったので家に帰りたいというより兄弟に逢いたいという思いがあった。帰っても、周りに隠れて家に入るといふことで、周りの目に気をつかいながらであった。出る事ができなかった。」(1941年生 男性 1952年入所)

「帰りたいと思ったが、近所との関わりで帰れずつらかった。」(1936年生 女性 1965年入所)

(2) 望郷の念無し

数少ないが望郷の念が無かったと言う人もいる。しかし、いつでも出られた人もいるが、60年代以降入所の人であり、あるいはそれ以前でも、戦争下であったり、園の方が楽だから、後遺症さらには予防法のために余儀なく断念したものだったといえよう。

自由に出られた

「他の人の『望郷の思い』、隠れてふるさとに帰ることなど、自分には考えられない - 出るなら、いつでも出れるのだから...。」(1937年生 男性 1955年入所)

「特になし。自由な生活だったから。(その頃退所した人もすでにいたので、自分も出られる!)人の話では少々聞いている。」(1937年生 男性 1948年入所)

「実際に育ててもらった祖母は面会に来ても立入禁止の境界を超えて、平気で入ってきた。勝手に出入り。自分も勝手に出入りして、『カゴのふたを開けたまま、カゴの中で育った』という感じ。」(1935年生 男性 1944年入所)

「特になし。断ればいつでも外出、帰省可能な時代になっていた。但し、時々何でここに自分はいるのか、2年も経つと何となく自分はおかしな人間(世間に通用しない人間)になったのではと焦る気持ち、デパートに行くのもおっくう、落差を感じる、になった。」(1951年生 男性 1969年入所)

「なし。“出入り自由”。月2回は家に帰っていた。」(1931年生 男性 1964年入所)

戦争下で断念

「戦争の混乱した状態。園外も暮らしにくい世の中だったので、外へ出ようとは思わなかった。戦争がなければ、帰りたい、逃げたいと思ったかもしれない。」(1922年生 男)

性 1943 年入所)

園の方が楽

「仲良く入所者同士で生活できていたので、出たいと思わなかった。家へ戻れば病気のことと肩身の狭い思いをするだろうから、園にいる方がラクだと考えていた。」(1926 年生 男性 1941 年入所)

後遺症

「思わなかった。前半は思ったことがあった。が、後半は、いくらでも帰省できた。自分の場合夜行っても夜帰ってくる具合だから。帰りたいたと特に思わなかった。昔の顔、手足でなかったから、見せたくなかった。(1926 年生 男性 1946 年入所)

予防法がなければ

「島に帰ろうという気持ちは、100%ありませんでした。その中に入って、こういう病気だと、こういう予防法だという、知識が得られれば得られる程、親に対する同情心、兄弟に対する同情心、私のためにそうとう悩んだらうなあと、当時小6生、中1生で、そんなに考えなかったけど、学校を卒業し外で働き、そういう仕組みが、わかればわかる程、家族や又故郷に帰っても大変だと、あれはそういう病気だったということで、色目で思われるのも嫌だという感じで、故郷に帰るとい、錦を上げてということは100%なかった。向こうから、遠ざかるような気持ちで、逃げるような気持ちでした。そういう気持ちになって、今、思うのは、予防法がなければ、そういう気持ちには、ならなかったと思う。ただ、それだけ。今のAIDSでも、隔離されたら大変ですよ。全滅ですよ。それを治療は受けるけど、かくしているから、その人の中にも自分で公表する人もありますけど、かくれながらにして、家族には迷惑をかけないという、そういうことではないか…。その制度が、今のような開けた社会であれば、我々もそんなに苦労はしなかったと思う。」(1937 年生 男性 1951 年入所)

園が故郷

「小さいころから各地を転々としていたので、他の人とは逆に園がふるさとに思う。」(1940 年生 男性)

「療養所があったから生きてこられたという感謝の気持ちはあるんだけど。4～5歳の子、昼は遊ぶけど夜毛布をかぶって「かあちゃんよー」と泣きさけぶ姿、皆ここから出たいという思いはあった。自分の中に故郷がどことはいえない。被害、差別を受けてきたから故郷と言いたくない人はいっぱいいる。自分の故郷は園と思っている。」(1941 年生 女性 1949 年入所)

「社会に出ることが故郷へ帰ること。住んでいるところ園が第2のふるさと」(1946 年生 男性 1958 年入所)

(3) 逃走経験

逃走を考え実行した人もいた。しかし、連れ戻され、例え家まで帰れたとしても、居場所がなかった。

逃走を考える

「仲の良かった友達と”いかだ”を作って逃げようと思ったが、その友人は死んでしまった。両親の面会はよくあった。入療当時から、いつも、家に帰ることは考えていた。」
(1932年生 男性 1943年入所)

逃走

「2代目多田園長の時はそう思って逃げ出した。家に帰りたと思うことはもう病気が染み込んでいたのでそんな気にはなれなかった。」(1918年生 男性 1936年入所)

「逃げ出すために手を切った。療養所は嫌で仕方なかった」(1928年生 男性 1940年入所)

「しばしばある。裏の方から渡し船で逃げたこともある。」(1934年生 男性 1959年入所)

「逃げてバス等から通報があり、部屋をみて回り、後で説教された。(世間に迷惑かけて)」(1936年生 男性 1952年入所)

「入所後2ヶ月後に一時帰りたと言ったが、認められず、これをきっかけに逃げ出すことになった。」(1942年生 男性 1954年入所)

「家に帰ろうと思って抜け出したことがある。駅への道もわからなく迷子になりかけたが、シスターがさがしに来て、連れ戻された。一度帰省したことがあったが、自分が帰ってきたことを喜ぶというよりは「ばれるのではないか」という母の感じが伝わってきて一晩で戻った。3回めの転居をした家で、自分が生まれた家ではなく家に帰ったという思いはしなかった。」(1950年生 女性)

教育を受けに

「にげ出したいというよりも外の高校に行きたいと、とても思った。島にはもう身内もいなかったの、島に帰りたとは特に思わなかった。以前何十年ぶりかで島に行くと(退所後)島のおば一達に「あい、あんた生きてたんだねー」としみじみといわれた。」
(1947年生 女性 1960年入所)

「ここには将来はないと思っていたから、復学を理由に出ることを希望した。幸い、半年程で、希望がかなった。」(1947年生 男性 1968年入所)

3. 労務外出での苦勞

労務外出が、退所及びその後の退所生活へのつなぎになっていたのであろうか。労務外出をしていたという回答は多くない。その理由は、園の許可等の問題もあるが、「世間の目が怖い」(1930年生 女性)というものがあり、深刻である。

そして、その苦勞は、退所後働くことをめぐる苦勞に連なるものであった。「ハンセン病を隠すために様々な嘘をつかなければならなかった」(1944年生 女性)し、「とれるだけの資格をとっても、仕事は全てアルバイトであった」(1934年生 男性)という状況も多く語られている。また、働く理由も、「両親に預けた二人のこどものため」(1939年生 男性)あるいは、「厚生年金が欲しくて療養所から出勤していた」(1943年生 女性)という。

入所年が、60年後半になると、園公認の建築会社に来るまで迎えに来たり(1951年生 男性) 会社に療養所の事情を話して理解してもらい、働けた例もあった(1943年生 女性)ようである。以下、事例を挙げておこう。

「退所して子供2名もうけたが、離婚となり、子供(小5、小1)は自分が引き取った。しかし、再発して入所する。子供は両親に預けた。月に1回は帰省していた。子供に会うため、親の面会などの費用をかせぐため、帰省中にタクシードライバーとしてアルバイトしていた」(1939年生 男性 1958年入所)

「清掃会社の専務の方から、突然園に行ってきてくれとおばさんたちをつれてね。そして私は、『園って知らないから』とうそをついた。(専務は)これだからかと手をまねてこうされたんですよ。きつかったですよ。17、8年前になるかな。裁判が終わってその方から突然電話がありました。『あの時はすまなかったなあ』私だと気づいてどんなにきつかったろうね。すまなかったと、電話がありましたね」(1941年生 女性 1949年入所)

「月2回しか休みがなく辛かった。木材の運搬で苦勞の連続であった。」(1941年生 男性 1952年入所)

「職員にはなされた。クビになったのはそれ以外思い当たる節がない。」(1940年生 女性 1956年入所)

「社会復帰をするために免許証を取りにいった。収入からいくらお金が引かれた(収入査定)。社会復帰はいやがられているようであった。」(1942年生 男性 1956年入所)

4. 退所後の困難

退所後の生活での困難は、第一に、ハンセン病を隠すことであった。第二に、療養所にいたという経歴を隠すことであった。また、両親の居場所も隠した。したがって、履歴書が一番困り、履歴書を書き換え、また、仕事を探す場合も履歴書の不要な職を選んだ。地域的にも病気がことが知られやすい地方では就職は無理であった。また、受診のために仕事を休む理由を考えるのも苦労した。

このような状況では、多くの場合、仕事は、自営業、農業、土木事業関係や重労働、アルバイトなど不安定就業であった。

さらに、履歴書については、「嘘」も書かざるを得ない状況に追いつめられていた。そのため、受けられる権利例えば軍人恩給の申請を断念、受給権を放棄した例も見られる。

こうした事例は、50年生まれで、70年退所という人にも見られるのである。

また、社会生活を全く知らなかったので健康保険や年金の手続きにとまどったことも語られている。

こうした生活において、身体、精神的な困難から再発し妻子と別れ療養所に戻らざるを得なかった例もある。

療養所を退所しても、医療面では特に療養所に通わざるを得ず、その事さえ隠さざるを得なかった。また、再発の不安にさいなまれる日々でもあったといえよう。その意味でも「二度と戻りたくない」療養所との関係も断てなかったのである。

まず、全体的な事例を挙げておこう。

「自営業のため履歴書問題はなかった。健康診断を求められたことはあった。『癩病』にかかったことがわかったら、人がついて来ないので『細々』と続けてきた。契約に至らず、あるいは契約破棄、工作中かかったことのある眼科医に「帰れ」と言われたり、様々な苦労があった。公職にはつけないので遠慮してきた。」(1931年生 男性 1964年入所)

「大阪に出て、その足でトランクを持ちあてもなく働けそうな所を探して歩いた。ふと住み込みで乳酸飲料配達人募集という貼り紙がある家を見つけた。『よーし』と思い、大将(主人)に頼んだら『保証人は?』と聞かれ『広島に兄貴がおりますわ』と答えたが『広島ではどうにもならん、月末には集金があるし』と断られた。しかしその場で土下座して頼んだら『とりあえず配達だけ』ということで雇ってもらった。その後働きが認められ大将が保証人になってくれた。それがなければ(その後の人生は)どうしようもなかった。」(1932年生 男性 1952年入所)

(1) 病気を隠す

「ハンセンをかくすのに必死であった。」(1942年生 男性)

「ともかく人に知られないように細心の注意をはらった。曲がっている指をテープで1

本1本巻いて伸ばして、仕事に従事している。右手でやるべきところを左手でしたり、食事の際はできるだけ人にわからないように右手を隠したりと気を使っている。」(1934年生 男性)

「病気のことは口が裂けても言えない。無菌なのだから移すこともないし、危険ではない(履歴書に病気のことを書く必要ない)」(1944年生 女性)

「転職は何とかウソをついてきたが、入社後お金をかぞえる、という実技があって(金融関係だったので)指先のマヒがあってうまく、数えられなくて他のことはうまくやれるのに、それだけはどうしても、うまくやれなくて、上司からも同僚からも「何で君くらいの人が…」と言われてよけいに、あせってしまって、大変だった。これを通過しないと、正社員にはなれないことがわかっていたので、最後には何とかうかってほっとした。」(1938年生 男性 1952年退所)

「手を隠す(理髪点でも)。集金でお金を受け取るとき(特に小銭)困った、つらかった。」(1933年生 男性 1981年退所)

「ハンセン病であったことを隠さざるを得ず、他人に雇ってもらったり、他人と一緒にする仕事は考えられなかったので慣れないながらも自分で仕事をおこしていかなければならなかった。」(1918年生 男性)

(2) 履歴書

「1度だけ履歴書を書くのに困り採用試験を断念した(市役所の公用車運転手)。タクシードライバーのバイトは履歴書の提出なかったので気楽にできた。」(1939年生 男性)

「名前も変えていますから。仕事場に行くと、一番困ったのが、履歴書だった。履歴書が書けなかったですね。出身校の中学卒で出した。中学1年までいるからね。中退というわけにいかないしね。中学を中退したというわけに行かないから、出身地の中学はちゃんと卒業したという履歴書を書いて、あとは、通信学校も、ラジオ通信とかもやっていたから、通信学校を中退したとかそういう感じで。職場は、田舎で農業をしていたと。そこに来て、どういう仕事をしていたと、ここに来て自分がやった仕事を。全くウソです。」(1937年生 男性)

「履歴を書く必要のない職を選んだ。ちゃんとした仕事が出来ない。知られたら大変だからだ。」(1931年生 男性)

「予防協会等、あまり仕事を捜してくれないし、頼むのも避けていた。ここからの紹介となると病気だったことがわかるので。例えば刑務所から出てその紹介で仕事を捜すのは前科が言われるようなものだから。」(1953年生 男性)

「履歴書に空白ができてしまうので、できるだけ、気づかれないようにごまかした。昔のことは書かないようにした。今の仕事は、知人が紹介してくれたのだが、その知人には、「精神科的療養」をしていたと話した（精神病というほうが、まだましだった）。幸い、職場に恵まれ、過去の経験や、障害（足指切断）のことも、詮索されず、就職後も、一ヶ月程の療養休暇をとることができた。」（1947年生 男性）

「空白の履歴書（期間）を埋めるのに苦労した。自治会の書記をしていたので、会計をやっていた。雑貨屋をしていたとかごまかすのが大変だった。雑貨屋の手伝い、農協の事務などウソで固めた。」（1926年生 男性）

「履歴書には、新良田卒業は書かず、前の高校中退で届けた。デタラメの経歴を書いて出すので話が合わなくなり、そんなことへの準備もなかったので、刑務所帰りの者かと思われたようだ。そんな状況で最初の面接は失敗。2番目は勤めたものの知覚マヒあり、手から出血しても気付かず、体がもたず、すぐ退職。3番目で見つかった（63才まで勤めた）」（1937年生 男性）

「気に入った仕事があっても保証人の問題や学歴の問題（中卒）で就けなかった。又両親のことをきかれることもあって、『与那国にいる - 』とウソをついていた。（1943年生 女性）

「適当に経歴を作って書いた。療養所内の中学ではなく長崎の中学を卒業したことにしてある。その後は家事手伝いをしていたことにした。」（1950年生 女性 1962年入所 1970年退所）

（3）社会生活を知らず

「社会の事、何も知らない。遊びに行っても馬鹿にされる。人のやる事を見て覚えた。普通の人のように世間が分かるのに15年はかかった。年輩の人からいろんな事聞かれる。何もいえなくなる。家庭の事も聞かれるが、言えない。結局職場にいられなくなる。変人扱いされる。職場も転々と変った。実に37回も転職している。そこそこの会社には入れない。空白もあるし、結局、重労働しかなかった。」（1950年生 男性）

「外の生活、社会生活全く知らなかったので、健康保険や年金のことなどの手続きで困った。初めてなのでとまどった。ハンセン病のことは一切話さなかった。知られないようにした。」（1937年生 男性）

「最初は『履歴書って何だ』ぐらい何も知らなかった。世話してくれた人に書式を教えてもらったが『小学校を出てー』と書き方を知ったとき、顔色が変わったと思う。世話してくれた人に言われたとおり書いて。嘘をつくのはつらいわな。」（35年生、男性）

「退所して何も知識がなく肉体労働しかできない。一生けんめい働き過ぎ、3年で体調をこわし、また新生園へ。半年して、良くなり何か軽い仕事をとと思った。結核になる。2年間結核病棟へ。」(1930年生 男性 1958年退所)

(4) 嫌がらせ

「イヤがらせがあった。夜中の1時、2時にも、アンマ、マッサージしてくれると思ってチャイムを鳴らす人がいたり、おもしろがって、1Wに何回かならされて、かなわなかった。10年以上もあって、困った。ハンセンに関係することではなく、夜中のマッサージを断ったことでされたと考える。」(1932年生 男性)

(5) 再発の不安の中で

「『ここ出してくれ』と言ったら、それはまだ控えたほうがいい』と言われた。S41ころにマイナスが続くようになった。『毎月来て検査するようにすれば出てもいい』と言われた。籍は置いておいたほうがいい。いつまた再発するかどうかが不安。一旦出るとその後世話になったときに何を言われるかわからない。外で仕事を始めたとき、人の世話になった。「あまり無理はしなさんな」と気にしてくれた。いろいろ周囲が世話してくれた。」(1930年生 男性)

「島に戻り家族を養うため働こうとしたが、突然いなくなったことから、ハンセン病であることは皆に知れわたっていた。なじみの料理屋ではしを折られ、コップをゴミ箱に捨てられるのを見て、気づいた。家族からも地域からも歓迎されない死んだも同然の生きた亡霊なのだと感じた。ハンセン病を隠すため園で暮らすか、見知らぬ大都会でひっそり生きるしかないと思った。病気を隠し、通院も服薬もせずに復職した新しい新聞社の勤務で疲労が重なり再発し、顔の斑紋があらわれたため、さらに広がらない内に島を出なければ、と、妻子をおいて全生園に戻った。」(1944年生 男性)

(6) 告白 - カミングアウト

ハンセン病元患者であることを言っていた人もいるが、70年代以降の入所者である。

「自分が元ハンセン病患者であることをはっきり言っている。最初に言っておかないと後でトラブルになる。」(1934年生 男性 1971年入所)

「自分からハンセン病である事を言う事はないが、特に隠す状況でもなかった。」(1939年生 男性 1974年入所)

5. 転職や離職の経験

以上のような状況の中で、折角就職しても多くの人が転職や離職を余儀なくされたことが語られている。中には、37回も転職している例も聞き取られている。

いずれも、事情を話せないためや、ハンセン病であったことが知られるのをおそれたことである。

(1) 退所・就職の妨害

「大学を卒業したあと金融関係に勤務、2年目あたりに再発し、園へ行った。担当医に『仕事が厳しく、仕事しながら、治療はむずかしい。再入所しなければ、新薬は出せない』と言われ、無理をして月1回受診し、新薬を出してもらえるよう毎回お願いしてきたが、担当医は首をたてにふらず、『らい予防法を知っていますか？薬を出せば僕が罰せられます』と言われてしまった。…今思えばくやしいです。結局2年間通って病気もわるくなるし、特に鼻がつまって仕事に支障をきたすし…。もうどうでもよくなって、『もういいです』と担当医のところをはなれ、藤楓協会に行ってDDSの錠剤をゆずってもらって。でもね 僕プロミンうちすぎていて耐性があるってそのくすりは無駄だったんですよ。結局症状ひどくなって覚悟して、担当医に診断書かいてもらって 3年休職してもとの職場に戻るつもりでした。ところが、会社関連の診療所の診断でないと言われ内科にいったら慶応大の皮膚科に行かされそのDrから『長いこと本当に治療してこられましたね』と担当医は後輩だよと担当医と同じ内容の診断書をやっど書いてもらった。ところが上司が、変だと気づき、『本当の病気は？』と問いつめられ、ついに本当のことを言ってしまった。社長など主な人以外には知られたけれど3年間休職はさせてくれた。但、自分としては、それで会社に戻れないことは、わかっていた。」(1938年生 男性)

(2) 転職経験

「年輩の人からいろんな事聞かれる。何もいえなくなる。家庭の事も聞かれるが、言えない。結局職場にいられなくなる。変人扱いされる。職場も転々と変った。実に37回も転職している。そこそこの会社には入れない。空白もあるし、結局、重労働しかなかった。」(1950年生 男性)

「新良田教室を卒業して友人をたよって鹿児島にいき、なかなか就職できなかったことでひねくれたりもした。物産会社の事務に就職したが、そこで園にいた人とバッタリあって(その人は7年勤めていたが)その3日後、その人はやめていた。自分の仲間がその当時病気をばらされるのではないかと怖かった。自分のせいだと思いその職場を半年でやめた。」(1941年生 女性)

「第1回目は倒産。2回目は美容院で病気のことがうわさになり解雇される。3回目は結婚をすすめられ退職した。自立した生活がしたいので東京に出たが、資金がないので

全生園の寮母さんに相談、住み込みの仕事を紹介してもらったが、真の自立にはほど遠かった。」(1957年生 女性)

「逃げるときも、沖縄に行くと寮友に言って記念写真も撮った。皆一枚ずつ持っていたが、自分は写真の中に他の人の後遺症が写っていて、(関係が)分かるのがこわかったから焼き捨てた。皆は鉄工所とか無理な仕事だと再発するぞ、気を付けろと言ってくれた。友達のところへ行った。仕事の段取りをしてくれていた。友だちは園友の人。(園内でバンドを一緒にやっていた。バレるのではないかと。仕事は転々とした。お菓子工場で働いていたときに、たまたま同郷の知人にそこで働いているのを見られ、トンずらしたことも。沖縄では自分の経歴を知られるのを恐れて仕事を転々とした。仕事のあと、夜は勉強して。楽譜を見て、祖母に手紙を書くために。最初は内地に行くための旅費稼ぎ。横浜に行ってバンドの見習いになるため。23歳のころ結婚しようと思って園まで行って健康診断を受けた。結果は良かったが、『もういい、診断書を書こう。退所証明を出そう』と言われたが断った。『もしもらっても、(園の)門を出たら破り捨てるわ』と。もし(持って帰って)家で見つかったらどうする。だから退所証明は持っていなかった。

先に出てきていた園友が呼んでくれた。最初は町工場へ行って、次に車両会社に社外工で入って。ところが半年くらい経ったときに、社会保険に入れるから、と。検診があるとと言われて。検診の日には休んだ。血を採られたらこわい、バレると思っていた。次の日に出るとやっぱり血液検査を受けさせられた。その日会社を辞めた。結果が出てからでは遅い、と思っていた。次は大阪に行って、ロボット溶接の資格を取って働いた。」(1935年生 男性 1951年退所)

その他、転職経験に以下のような例が見られる。

「園の不自由者の世話(1週間)・豆腐づくりで市場にだす・洋裁技術習う・妹の経営するホテルの手伝い・カトリック教会内の洋裁作業所・従兄が勤務していた寝具リース会社(約30年間) 従兄の紹介で71歳まで勤務」(1930年生 女性)

「演歌歌手、バンドマン、タクシー運転手。(生活の足しになる、収入の多いのを目指した)。履歴の要らない職業の中で。」(1931年生 男性)

「最初のところでは、履歴のつじつまをうまくあわせられなくて不信がられ、2回目のところでは、知覚マヒが災いして、体がついていけず、不採用と離職を余儀なくされた。」(1937年生 男性)

「ヤオヤの住込み ヤクザのつかい走り 一杯呑み屋 荷役会社 キッサ店経営 無職」(1942年生 男性)

「新聞配達に住込み。社会保険や年金もない。タコ部屋生活」(1942年生 男性)

(3) 仕事の内容

公務員、療養所の仕事等についている人もいるが、多くは、「病気であることを知られる恐れが少ない」「履歴書のいらぬような仕事」、自営、農業、重労働、不安定労働であり、タクシードライバーも多い。比較的安定しているのは、身内や知り合いの「つて」をたどっての就職である。

自営、農業

自転車修理店、農業、アンマ・マッサージ、養鶏飼料の販売、食料品屋、新聞社を設立、家業、キッサ店経営、闇米販売

公務員等

公務員、ハンセン病予防協会の書記、療養所の医事班長、栄養班長、福祉室長等、園の不自由者の世話、豆腐づくり

企業

寝具リース会社、印刷所、ボイラー関係運送会社、タクシー運転手、タクシーの無線配車、金融関係、ガラス工場、トラック長距離運転手、ゴルフ場、ガラス工場、輸出用のラジオの組立て、仕上げの仕事、プラスチックの営業、鉄工所、機械関係、工場長、経理

肉体労働

プレス加工、建築現場、大工、機械修理や車修理の仕事、電気工事

商店等

ホテルの手伝い、米軍基地内のメイド、ハウスキーパー、生命保険の外交員、カトリック教会内の洋裁作業所、倉庫地帯でチェッカーの仕事、住み込みのそば屋、病院の掃除婦、旅館、居酒屋一杯呑み屋

職人等

住み込みの仕事(木杵職人)、演歌歌手、バンドマン、ヤオヤの住込み、ヤクザのつかい走り、新聞配達の仕事

(4) 仕事の苦勞

仕事に就けても、苦勞は耐えなかった。特にハンセン病であることを隠すために。

病を隠す

「退所後、高校を卒業して、本島へ上京。米軍基地内のメイド、ハウスキーパーなどに就いた。結婚後、生命保険の外交員などで働いた。その間ハンセン病であることは一切伏せていた。」(1944年生 女性)

「退職時に、身障手帳4級も取得、今までは、取得が、病名を知られるきっかけになると思い、できなかった。」(1947年生 男性)

仕事がうまく出来ない

「経理に最初からつけたので。クリスチャンだったので紹介されたのがクリスチャンの

社長さんだったのでよかった。経理はお金を扱うので信用がなくてはならない。だが、病気のせいで（手が変形）お金を数えるのにお札の計算がなかなか出来ない。つかめない。」(1926年生 男性)

「小売店をしている時にみんなが掛けで買い物して運転資金がなくなった。掛けで買う人達を拒否したり、請求したりすることはできなかった。」(1918年生 男性)

自分からへりくだる

「失対事業に行ってる時も自分からへりくだっていた。」(同上)

再発の恐れの中で

「退所後、1年間の休職期間が残っていた。休職中に電気工事の仕事（知人の）を手伝ったりしていたら、そちらのことも面白くなり、復職の話もあったが、電気の仕事をするようになった。特に転職を余儀なくされたわけではないが、”再発したら...”という思いは2～3年の間あった。」(1934年生 男性)

(5) 転職の理由

転職は、多くの場合、ハンセン病が原因であるが、病気だと分かって解雇されるときだけではなく、判明しそうになった時点で、居づらくなり自ら辞めるような形になる事例が多い。

病気が噂になり解雇

「第1回目は倒産。2回目は美容院で病気がことがうわさになり解雇される。3回目は結婚をすすめられ退職した。自立した生活がしたいので東京に出たが、資金がないので療養所の寮母さんに相談、住み込みの仕事を紹介してもらったが、真の自立にはほど遠かった。」(1957年生 女性)

倒産ではあるが

「住み込みの仕事（木杵職人）をしていたとき蓄膿症で手術することになったが保険証がなかった。そのため園に頼んで手術してもらった。このことがあって、仕事場に戻ったときから、親方、特に奥さんの態度が変わった。食事は家族と一緒にままだったが、風呂が最後にまわされるようになり、自分だけ近くの風呂を使うようになり、洗濯も自分の物を自分が洗うようになった。倒産により退職となった。」(1939年生 男性)

上司が気づく

「上司が、変だと気づき、「本当の病気は？」と問いつめられ、ついに本当のことを言ってしまった。社長など主な人以外には知られたけれど3年間休職はさせてくれた。但、自分としては、それで会社に戻れないことは、わかっていた。」(1938年生 男性)

「最初のところでは、履歴のつじつまをうまくあわせられなくて不信がられ、2回目の

ところでは、知覚マヒが災いして、体がついていけず、不採用と離職を余儀なくされた。」
(1937年生 男性)

(6) 転職経験無し

病気による転職経験なしと応えた人もいるが、病気を知られなかった事によると応えた場合もあった

「退所後もそれ以前と同様、家政婦の仕事に就いた。知っている人のいない所を選んでつとめていたのでやむを得ず転職、離職するようなこともなかった。(1944年生 女性)